
もしも明日が滅びていたら

落鮎 雁

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

もしも明日が滅びていたら

【コード】

N5945B

【作者名】

落鮎 雁

【あらすじ】

私たちは若い。私たちは自分勝手だ。私たちはお互いそう違いはない。だからこそ、何かが起こせるはずだ。

もしも明日が滅びていたら

(前書き)

戦争描写が少しあります。苦手な方はお控え下さい。

もしも明日が滅びていたら

もしも明日が滅びていたら

死んだと思っていたから、目が覚めたことはひどく意外だった。

重くのしかかっているものが何かは最初は分からなかった。息苦しかったので、地を手で搔き足で蹴り、しばらくそうしていると這い出ることができた。

腰が痛むのを堪えて立ち上がると、

見回すまでもなく景色が

聞くまでもなく音が

嗅ぐまでもなく匂いが

全てが向こうから感覚器に飛び込んできた。

地平線まで気持ち良く見渡せる焼け野原、散らばった銃に軍帽に軍靴、まだらに折り重なった二色の軍服姿、黒や肌色や赤

迷ったように半端に吹いたり止んだりする熱い風、遠く飛ぶ戦闘機の尻容まりなエンジン

焦げた苦い匂い、灰の乾いた苦い匂い、血のすえた匂い

振り返らずとも分かる。俺が下敷きになっていたのも、仲間だけが敵の兵隊だかの身体が重なったものだろう。

見ているのも聞いているのも感じているのも、

俺だけのようだ。

そう思ったのに、早くも視界の中で動くものを見つけた。

条件反射のように腰からピストルを抜いた。長銃は何処かへ吹き飛んでしまったのか、手元に無かった。

ビデオを見せられているように。

そいつは仲間だか敵だかの身体が折り重なった下から這い出てきて辺りの様相にしばし茫然として

すぐに俺に気付き、腰のピストルを抜いた。

違うのは軍服の色だけだった。

可笑しくて

思わず銃を取り落として笑ってしまった。

声を上げて腹を抱えての大笑いは、ここ数年無かったことで涙まで出てきた。

もしも明日が滅びていたら

もしも明日が滅びていたら

「何人撃った？」

「五人ぐらい」

「俺三人」

「なんだ、俺らの貢献ってそんなもんか」

「だったら居なくても良かったなあ」

「だなあ」

軍服が折り重なった上に腰掛けて、俺達はしばらくのんびりと語り合った。俺は下手な英語と身ぶり手振り。あいつは訛っているけど俺に合わせて、簡単な英語だけで話してくれた。

なぜだろう、今上から爆弾が落ちてきたりしてこいつと一緒に死んでも悔いは無いな、と思った。

「何でお前笑ったの」

「だってお前、俺とそっくりだったもん」

「そうか？」

「顔とかじゃ無いけどさ、死体の下から出てきて、ちょっとの間ぼけっとして、相手見つけて銃構えたから」

「真似してんじゃねえよ」

「はあ？違っし！」

今度は一緒に笑った。

「あながち同じだよな」

「うん、考えてることとか」

「行動パターンとか」

「個性とか言ってたけどさ、結局みんな特に代わり映えしないよな」

「生意気だったよな、俺達」
「生意気だった。大人より立派でえらいって思ってた」
「ほんとは大人ってすげーよな」
「爆弾も銃も戦車も、造ったの大人だもんな」
「兵隊動かしてんのも」
「国動かしてんのも」
「俺らじゃ絶対無理だもんな」
「世界の国も覚えられなかったもんな」
「だからこんなことしか出来ないんだな」
「大人はよく分かっているよな」
「すげーな」

世界共通の言語って素敵だ。ちょっと知ってるだけでこんなに話せる。

「でも、何で俺を撃たなかったの？」
「大笑いしてて気持ち悪かった」
「ひっでーな」
「ウソウソ。だって撃つ理由が無かったから」
「そっか……みんな死んでたもんな」
「でも、それまでに顔合わせてたらたぶん撃った」
「だろうな。事実俺以外は撃ったもんな」
「なんでだろ」
「そうだな、なんでだろうな」

なんで俺達は殺し合ったのか。

「ガキの頃さ、ストライキとか言っで仲間で授業さぼったことあったんだ」
「ああ、やるよな、あの頃ぐらいの俺ら」
「そんなふうには、こんなこともストライキとか言っでさぼらなかつたのは」
「なんでだろな」

そうしてれば、今俺の下で死んでいる奴は死ななかつたかもしれない。
ない。

この戦いの障害にもなれたかもしれないのに。

「そうしたらどうなつたと思う」
「大人は手を打つだろうな」
「俺達、きつとひどい仕打ちを受けたんだだろうな」
「家族、殺されたりしたのかな」
「拷問受けてたりしたのかな」
「それって、ここで殺し合うよりひどいことなのかな」
「わかんね」

「結局、俺達はさ、」
「うん」

「目先のことしか考えなかつたし、」
「うん」

もしも明日が滅びていたら

もしも明日が滅びていたら

「自分のことしか、考えないし、」
「うん」

こうして戦争は終わらない

「俺達、どうなるんだろうな」
「わかんねえよ」
「わかんねえよな」
「でも、やっぱり、帰りたいよな」
「帰りたい」
「故郷、まだ残ってるかな」
「……」
「……」

しばらく、赤茶けた空を見上げた。
熱い風の音を聞いた。

あの空が青くなる日が来ても、俺達は変わらず自分のことに精一杯になりながら生きるんだろう。

それでも。

もしも明日が滅びていたら

二人で焼け野原を歩いて、一本道に出た。
平野を貫く道は両側の地平線へ続いている。

「じゃあ、俺、こっちだから」
「そうだな」

最後、二人で向かい合った。考え方も動き方も、鏡のようにそっくりな、そう珍しくないお互いを。

「もし、故郷が無くなってたら、どうする」
「少し考える。」

「…もしかしたらこの調子で、どこまで行っても焼け野原かもな」
「少し笑う。」

「そうだよな。もう世界全体が滅びてるかもしれないよな」
「有り得るよな」

「もし、そんなことになってたらさ…」
「なに？」

もしも、明日が滅びていたら。

もしも明日が滅びていたら

「また、ここに戻ってこないか？」

「俺も、同じこと考えてた」

ああ、俺はこんな優しい顔で笑えているんだろうか

「ずっと待ってるからさ」

「滅びてたらの話な」

「忘れるなよ」

出会ったことを
生きてたことを

殺したことを
話したことを

俺達がどういう生き物なのか

立派でもえらくもないけれど
ストライキぐらいの規模でも、何か起こせることを

だから、もしも明日が滅びていたら、二人でここへ戻ってこよう

じゃあな

この長い一本道の先にある現実を
とりあえずは、確かめにいくんだ

それが俺達が初めて自分の意志でする、自分だけのためじゃない
こと。

もしも明日が滅びていたら

もしも明日が滅びていたら

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5945b/>

もしも明日が滅びていたら

2009年3月11日00時31分発行